



Pachinko Chain Store Association

第54回PCSA公開経営勉強会 発言録

<概要>

開催日：平成27年11月19日（木）

時間：午後3時30分～5時30分

会場：アルカディア市ヶ谷「富士の間 東」（3階）

<スケジュール>

開会挨拶 午後3時30分 加藤 英則 副代表理事

第一部 午後3時30分～5時30分

講演『やがて世界は1つになる』
～古希を迎えた佐藤 洋治の人生70年で到達した哲学～

講師：佐藤 洋治 様

株式会社ダイナムジャパンホールディングス 取締役兼相談役

一般財団法人ワンアジア財団 理事長

PCSA チェーンストア経営分野アドバイザー

閉会挨拶 午後5時30分 大石 明德 副代表理事

<講師 プロフィール>

佐藤 洋治 様 (Sato Yoji)

株式会社ダイナムジャパンホールディングス 取締役兼相談役

一般財団法人ワンアジア財団 理事長

P C S A チェーンストア経営分野アドバイザー

生年月日

1945年(昭和20年)9月24日(70歳)

経歴

1968年	3月	早稲田大学商学部卒業/学士(商学)
1968年	4月	株式会社ダイエー入社
1970年	1月	佐和商事株式会社 (現 株式会社ダイナム) 入社
1978年	9月	代表取締役社長 就任
2000年	6月	代表取締役会長 就任
2003年	4月	株式会社ダイナム総合投資 代表取締役社長 就任
2003年	12月	リッチオ株式会社(株式会社ダイナムホールディングス) 代表取締役社長
2007年	3月	株式会社ダイナムホールディングス取締役兼代表執行役社長
2008年	12月	株式会社信頼の森 代表取締役 就任 一般社団法人 信頼の森 理事
2009年	12月	一般財団法人 ワンアジア財団 代表理事(理事長)/現任
2011年	4月	一般社団法人 信頼の森 代表理事
2011年	9月	株式会社ダイナムホールディングス 取締役兼代表執行役社長 退任 株式会社ダイナムジャパンホールディングス 取締役兼代表執行役社長
2013年	6月	株式会社ダイナムジャパンホールディングス 取締役会議長
2015年	6月	株式会社ダイナムジャパンホールディングス 取締役兼相談役/現任

主要著作

- ① 賢者180名:「命」の言葉 (徳間書店、2002年):監修
- ② 東洋の賢者100名:珠玉の言葉 (徳間書店、2004年):監修
- ③ アジア共同体の創成に向かって (芦書房、2011年):編著

大学講演

- ①「ワン・アジアクラブの理念とモンゴルにおける大規模農場の夢」
(韓国、建国大学:2005年11月3日)
- ②「実践経営戦略:経営者に学ぶ中小企業経営への実際」
(日本、専修大学:2008年11月8日)
- ③「経営戦略:わが社の経営を語る」
(日本、嘉悦大学:2009年10月14日)
- ④「アジア共同体の創成に向けて」及び「世界はやがて一つになる」
(早稲田大学、北京大学、高麗大学、政治大学(台湾)、インドネシア教育大学、チュロ
ンコン大学(タイ)、カザフ国立大学、キルギス国立大学など、アジアを中心に世界の約
200大学で講演)

皆さんこんにちは。ワンアジア財団理事長の佐藤洋治です。パチンコ業界には24歳で父親が亡くなって以来、46年間、今日まで業界の皆様にお付き合いいただきまして、誠に感謝申し上げます。

5年ほど前から、仕事のウエイトを段々ワンアジア財団に移しました。現在はほとんど財団の仕事で、アジアだけじゃなくてアメリカ、ヨーロッパを含めて40か国、200の大学。年間に大体80の大学を飛行機で回りながら財団活動を続けております。

目的は、世界が争い、戦争が無く、お互いに助け合いながら役割分担をしながら平和で安心した生活が地球上で出来るはずだと、そういう未来、夢と希望を若い大学生に持っていただきたい。そのための根本的な哲学的な命題をほぐしながら、学生と対話をしているというのが現状です。今日の2時間の講演も、実はすでに200の大学でやってきた学生に向けた内容と同じです。学生の皆さんは頭が柔らかいのでスッと入ってリアクションもいいんですが、少しお年を召されると段々固くなって何を言っているか分からないという事があるかも知れません。一度で分かる方はまずいませんが、少しずつ、あらゆるところで講演をしております。明日は朝、大阪大学に行きます。戻ってきて土曜日はゴルフです。そして日曜日は名古屋で講演です。そうやって、今、講演の活動とゴルフ、これが最大の楽しみです。講演は若い学生と対話しながら、未来の夢、希望を語っていくわけなので、若い学生からエネルギーをもらえる状況にあります。そんなことで、これから2時間のお付き合いですが、どうぞ聞いていただければと思います。

大学で一番数が多いのが中国。中国には4年制の大学が2,000以上あるんですね。日本では700くらいですから3倍以上。ですからどうしても中国の大学が多くなります。中国の大学でも今日と同じ話を5年間続けてきたわけですが、大学には書記という共産党の方が学長よりも高い位置にいて、必ず講義の中身をチェックするんですね。5年間、全くクレームがついたことが無いという事で、安心して中国でもこの講演を続けております。

それでは、財団の状況からお話し申し上げます。財団の目的は、アジア共同体の創成に寄与することで、財団はアジア共同体を作るためのプログラムとか、スケジュールを一切持ち合わせておりません。逆にアジア全体の若手の教授の皆さん方に期待をしており、次の共同体を作るための色々な新しい提案を教授の皆様方、そして何よりも大学生の皆さん方。20年後、30年後に40代、50代になって世界の中心的な役割を担う今の若い方達の未来に期待したいという事で、財団は共同体の環境を作る仕事をしている、という状況にあります。そして3つの活動原則。「民族・国籍を問わない」、2つ目「思想・宗教を拘束しない」。すなわち、思想、宗教はどうぞお持ちくださいと、ただし財団としては拘束しませんという事。3つ目「政治に介入しない」ということです。皆さん方、政党や政治家を支持するのは結構な事で必要な事です。ただ、財団としては特定の政治家とか政党を推薦したりしません、という意味です。

この3つの原則で、ちょうど5年前、2010年9月から日本大学の国際関係学部、これは静岡県三島にあります。そのこの大学と韓国の高麗大学、この2つの大学でスタートして、財団の寄附講座が始まりました。そして5年間の間に、レジュメを見ていただきますと日本はすでにこのプログラムを開設済なのが46校、準備中が45校。韓国は43の18、中国は59の27、そして香港、台湾。北朝鮮はひとつ、平壤科学技術大学で準備中です。シンガポール、タイ、モンゴル、ベトナム、ミャンマー、ネパール、フィリピン、カンボジア、インドネシア、マレーシア、スリランカ、インド、バングラディッシュ、ラオス、ブータン、キルギス、カザフスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、オーストラリア、これが財団が考えているアジアの地域です。非常に広域です。北の方は出来ればロシア

が入ってほしい。そして南はアセアン 10 か国、+インド、パキスタンさらにカザフスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンという中央アジアも含まれる。そして、オーストラリア、ニュージーランドも含まれる。財団が考えているアジアのテリトリーというのは、1955年インドネシア、バンドンでアジア・アフリカ会議、第 1 回のバンドン会議によります。その席にはインドのネル首相、インドネシアのスカルノ大統領、中国の周恩来さん、当然日本からも参加しております。そこで、第 1 回が開かれたときの参加国は大体アジアが 20 か国、アフリカ 8 か国の 28 か国くらいでした。それから 50 年後、2005 年に全く同じ場所でバンドン会議が開かれました。そこでは全部で参加国が 100 か国。アジア約 50、アフリカ約 50 ということで、そのバンドン会議のアジアの範囲の考え方を財団は踏襲しております。

そして、この表を見ていただきますと、米国、カナダ、メキシコ、イギリス、アイルランド、イタリア、ロシア、ウクライナ、ポーランド、トルコ、エジプト、コンゴとアジア地域以外の大学もどんどん増えています。財団が 5 年間活動して色々な大学を回っている間に、若い学生から「アジア共同体の創成を目的とすることは理解できるんですが、そのアジア共同体の創成が最終目標でいいんですか」という意見が出まして、おっしゃるとおりだなと。アジア共同体は通過点であって、最終目標は世界共同体でなきゃだめだなと考えた時に、アジア地域以外の大学からも興味があると、ぜひこの寄附講座を大学ではじめたい、という大学が出てきて、アジア以外の大学でもアジア共同体講座が行われています。

大学でこの講座をスタートするための条件は 2 つだけです。ひとつは正規の科目として、90 分の授業が 13 回から 15 回行われ、学生が登録して単位が取れる事。そして、なおかつ教壇に登る教授ができたなら毎回チェンジしてください、それもその大学以外の教授、できれば国を超えた大学から先生を呼んで教壇に立たせてください。その 2 つの条件があります。その運営費を財団が寄附をするという形を取っています。はじめてみたら、どの大学も単位が取れる講座で、しかもアジアの色々な国の大学の教授が教壇に立つ。非常に新鮮で学生にとっては視野が広がる。面白いという事でどの大学でも人気があります。そしてその結果、現在 199 の大学で講座は開かれているんですが、このうち約 60 の大学がこれを正規の科目として、今後ずっと継続してこのプログラムを大学のカリキュラムに取り入れます、というのが最大の成果だと思います。現在、40 の国と地域で準備中を入れて 350 の大学まで広がってきました。ほとんどの大学は 1 回まわって、90 分 1 コマいただいて財団の基本的なビジョン、そして人類の未来に対する夢と希望を若い人に持っていただくための、哲学的な普遍的な根本的なひとつの考え方をプレゼンテーションさせていただいて今日来ているという状況にあります。

今日は、近年、世の中がどのような状況にあるかという事で、全く専門も違う 4 名の賢者たちの言葉から入らせていただきたいと思います。まずトップバッターは Arthur Koestler。彼は今から 32 年前に 78 歳で亡くなりました。彼はブタペストで生まれたユダヤ人なんですが、人生の後半はイギリスに移住されて、最後は尊厳死。客観的に見ると自殺なんですが、彼は尊厳死という言葉を使っています。その理由と原因は定かではありませんが、人類の未来を悲観した状況で夫婦そろって尊厳死をしてしまった。彼の言葉、心に残るセンテンスだと思います。『人類にとって最も重大な日は何時かと問われれば、1945 年 8 月 6 日と答える。その日まで、人類は「個としての死」を予感しながら生きてきた。人類史上初の「原子爆弾」が広島上空で太陽をしのぐ閃光を放って以来、人類は「種としての絶滅」を予感しながら生きてゆかねばならなくなった。広島原爆投下、8 月 6 日を以ってキリストの時代(A.D.)は終わり、ヒロシマ以降 P.H.(Post Hiroshima)0 年と稱すべきである。人類究極の苦悩となる、永遠に繰り返される種内戦争、種内殺戮こそが、「人(人間)」の中心の特徴なのである。』非常に印象的なセンテンスを残しながら彼は 78 歳でこの世を去って行ってしまったわけですが、それ以前は個々の死を予感しながら生きて行けばよかったんですが、原子爆弾以降人類が滅亡してしまうほどの大変な兵器が

登場してしまったと。そしておそらく人類の未来は暗いな、という状況にあります。

ふたり目、Arnold J. Toynbee。彼はイギリスの歴史哲学者です。『いずれ人類は、遅かれ、早かれ、世界全面核戦争で自滅するでしょう。自己中心性を克服することです。これが平和の「カギ」です。この「カギ」を手に入れるまでは、人類の生存は今後とも疑わしい。』彼も40年前、80歳で亡くなる前にこういったセンテンスを残していったわけですが、彼たちが核戦争について注意を促していると思います。現時点で核兵器を所有している国が約10か国。アメリカ、ロシア、中国、インド、パキスタン、フランス、イギリス、イスラエル、北朝鮮、シリア、イラン、その辺にあるんじゃないかと。そして何と、現在ウェブサイトに出ている核弾頭、合計すると1万8千発あります。これは地球上の全都市を壊滅するくらいの量があるし、地球上の72億の人々を何回殺しても余りあるほどある。これはいずれ第三次核戦争になることが非常に危惧されるという事だと思えます。

それから、全く違う日本の哲学者、紀平正美さん。彼は三重県の哲学者、学習院の教授としても有名な方で、彼はもっと哲学的な側面から『自己意識なるモノの研究が、一切の秘密を解く「カギ」となる。究極の實能—生命の大元、中心『X』とは何か?』。非常に哲学的な単語が並んでいますが、彼が提案したこのセンテンスは意味深いと思います。

最後、茂木健一郎さん。彼はテレビにも出て来る現職の脳科学者です。『どうして物質である「脳」の活動から、意識が生み出されるのか。この単純明白な事実を説明する事が、こんなにも困難なこととは……。ひょっとしたら、どこか根本的なところで、この世界の真相を捉え損ない、とんでもない勘違いをしているのかもしれない。』。脳科学者として彼は単純に、物質である脳がなんで意識を持てるんだと、その単純な仕組みすら今分からないんです、と率直に言っています。

この4名の賢者たちが言っている事は全く視点が違うんですが、その彼たちの提案の答えを見つけ出そうとすると、全て同じところに帰結されます。同じ問いになっていきます。今日は最後まで話を聞いていると、4名の賢者たちの答えに近づくことは可能です。今、地球上に72億の方達が存在をして生活をしています。この72億の方達は3つの壁の中で物事を考え、判断して、行動していると思われま。1つ目の壁は、自己・自我の壁、2つ目の壁は企業・団体の壁、宗教も入りますね。3つ目の壁は国・民族の壁です。

1つ目の自己（自我）の壁。例えば、ここに今約200名の方がいる。皆さん方はそれぞれ自己（自我）があります。そして、それぞれの方達がその壁の中で常にものを考え、自己にとって役に立つか立たないか、有利か不利かという基準を設けて、選択をして、考え、行動しているように感じます。しかし、時として、あまりにも自己中心的な考え、自己の主張ばかりしていると少し疲れてきますね。いやになっちゃうこともあるかもわかりません。

2つ目の壁は、企業・団体の壁です。たとえば、スマートフォンの分野では、韓国のサムソンが世界のシェアの30%をとって事実上世界 No.1 でした。昨年の秋からアップルがナンバーワンの座を取り、現在もアップルがナンバーワンです。このスマートフォンの世界では、そのほか日本のメーカー、中国メーカー、ヨーロッパのメーカーがしのぎを削りながら競争をして、未来に残れるか倒れるかという激しい競争をしています。しかし、冷静に考えてみるとアップルとサムソンというのは企業の名前です。名前が喧嘩している訳じゃないんですね。アップルを背負って働く人、サムソンを背負って働く人、その働く方々の自己（自我）がお互いに喧嘩をしている訳です。アップルは名前だけです。サムソンも名前だけです。しかし、この企業の壁の中で、いかに利益を追求していくか激しい競争をしていま

す。どの業界もそうですが、やがて少数の勝ち組、大多数の負け組という図式にこの市場主義経済は帰結すると思います。

そして3つ目。国・民族の壁。例えば、日本と韓国における竹島・独島の領有権の問題、また中国と日本における尖閣諸島の問題。これは政治家がお互いに前面に出て、国益を主張し合い、各メディアもそれを報道して国民感情が非常に悪化している現状があります。これは簡単な話ではありません。相当長くこの問題は尾を引くんだらうなと思います。しかし、市民レベルで考えると、韓国の人と日本の人はお互いに観光に行って仲良くなれるのにとか。中国も同じですね。大量に来て爆買いをして、中国の人にもっと来てほしいな、とか。お互い仲良くやれるのに、政治の世界ではぶつかってしまうとそれをメディアが報道して国民感情まで悪化してしまうということがあります。この壁の中で物を考え、判断して行動するというのは人類の、過去、現在に至るまで、国連でもそうです。それぞれの国の主張をお互いにぶつけ合う。どこに落とし所があるかな、という状況にあります。しかし、この利益の取り合いが延々と続いていくと、20世紀の第一次世界大戦、第二次世界大戦、21世紀の今日も、特にエネルギー資源、地下資源、食料等の奪い合いに関しては戦争につながる可能性が大きいです。これを、この壁の中で考えるのは悪いとか良いとかいうレベルじゃなくて、これは必然的にそういう仕組みに組み込まれてやっている訳なので、それは批判の対象になりません。

しかし未来、人類がこの壁の中だけでもの考える事から卒業して壁の外側から全体を見渡す。そして、できれば当事者の二つの国にプラスになる事を考える。更にいえば世界中がプラスになる解決策を模索し始めるのが卒業の時だと思います。卒業という言葉は、途中の時間は十分に経験をする、その時間を費やす。それがあって初めて次のステージの卒業だと思います。十分に時間を費やしてお互いに主張し合うんですが、どうにもならないなど、解決が難しいなど。しかし、何とかお互いに良い方法が無いのか、例えば日本で北方4島についてロシアとの外交で4島返還、2島返還論がありました。最近では、何とか両方の国にとってマイナスにならない解決策があるんじゃないかと。ある意味では、長い時間が経って、外交の先が見えてくるような気がしないでもないです。最近そういう発言が出てきました。ですから、どうすれば卒業の時期に近づくか、という事が次の人類にとっての最大のテーマになると思います。今日の話はこの卒業に近づくための話でもあります。

ここに大きなリンゴの絵があります。このリンゴの表面には多くの学問の領域、そして多くの問題がひしめいております。例えば、政治、経済、法律、芸術、スポーツ、歴史、科学、文学、教育、医学、物理学、そのほか貧困の問題、経済格差の問題、あらゆる問題が地球上にあります。学問の領域でも、それぞれ専門家が掘り下げていっています。それぞれの視点から更に問題を掘り下げていくと、やがてリンゴの芯のところでは、地球上のあらゆる問題を解決に導くための普遍的、根本的なテーマにぶつかります。その普遍的、根本的なテーマというのが「自己(自我)とは何か」、「人(人間)とは何か」、「生命とは何か」、「實能とは何か」の4つの命題にぶつかります。日常では、この4つの命題を掘り下げるといふ事は無いんですが、今日は皆さんにとっても、経済活動にとっても、例えば松下幸之助さんに水道哲学がありますよね、松下幸之助さんの哲学は水道の水、軒先の水、誰が飲んでも誰も文句を言わない。ですからモノづくり、誰もがいつでも欲しい時に欲しいだけ手に入る、これが経済人の役割だ、という哲学を残しています。スタートはそれを達成したいという松下幸之助自己から始まるんですが、やがて、彼は出来たら地球上の人を幸せにしたいと、人というものが対象になってきます。

こうやって、あらゆる切り口から段々世界中の人が対象になってくるという事だと思えます。いずれにせよ、この4つの命題は哲学の命題でもあるんですが、この4つの命題に対して、哲学の大御所たちと会って対話を重ねていく中、「この命題はいかがですか」と言うのと「その命題は間違いなく重要な

命題です」という答えが返ってきています。そして今日は4つの命題を順番に掘り下げていきたいと思えます。その事によって、未来、本当に争いが無いところに人類が到達するという期待を込めて話をさせていただきます。

まずひとつめの「自己（自我）とは何か」という哲学的なテーマについては、2700年前にギリシャのデルフォイという所に2神殿が建設された時に神殿の正面に額文字が掲げられました。タレスという哲学者を筆頭に当時のギリシャの7人の賢者たちが考えに考え抜いた後、最終的に掲げられた文字が

日本語では「汝自身を知れ」と訳されています。ギリシャ語で「^{グノーシ・セアウトン} γ ν ὄ θ ι σ ε α υ τ ὀ ν [gnothi seauton]」。要するに、自己とは何者かということを知ることが、人類にとって非常に重要だという事で、デルフォイの神殿の銘については、タレス、キケロ、モンテーニュ、ルソー、岡倉天心が言及しております。後ほどゆっくり読んでみてください。要するに「自己とは何か」というテーマは2700年前から哲学的なテーマであって、今日まで答えを求めて哲学の領域でも掘り下げているという状況です。今日は哲学で出なかった答えを皆さんで掘り下げて出しちゃおう、という試みでもあります。

皆さんは今、話を聞いています。そして、この話が役に立つのか立たないのか、という判断をして聞いていると思います。皆さんの体に自己が存在しているのは間違いないんですが、病院で検査しても見えないので分かりません。レントゲン撮っても出てこない。でも間違いなく意見を言う事ができる自己が存在している。全てを意識したり認識したりする自己がある。でもその自己というのは皆さんの体のどこにあるんでしょうか。これは証明できないからイメージで結構です。（ここで会場に質問）今、大体、心、脳、体全体、血液という答えが出てきました。この質問は自己（自我）というものが何かという事を掘り下げるためには非常に必要な問いなんです。アジア200の大学で同じ問いをしてきました。大体3つの答えに集約される。いまおっしゃった頭である、心である、体全体である、という3つに集約されます。でもそれは証明する事ができません。大病院に行っても証明できない、でも存在するのは間違いない、という見えない代物なんです。

次の問いがもっと大事なんです。生まれた直後の赤ちゃんの時、皆さんの自己は存在していたか、していなかったか、これが質問です。（ここで会場に質問）してたという方が大体4分の3くらい、してないという方が4分の1くらいです。これから2つのストーリーをお話します。このストーリーによると生まれたばかりの赤子には、自己（自我）の存在はないように思われます。

ひとつ目の話。これは西暦1194年～1250年、フリードリヒ2世という神聖ローマ皇帝、シチリアとドイツの国王を兼ねた方が家来に命令を下しました。これからまもなく赤ちゃんが生まれそうな家来の奥さんたち、そしておそらく1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月後に生まれてくるだろう赤ちゃんが生まれてきたら、一切、赤ちゃんに名前も呼ぶな、話しかけることもするな、そして最初に赤ちゃんがしゃべる言葉をメモしてフリードリヒ2世に持ってこいという命令でした。王様は、赤ちゃんは神の授かりものであるから、雑音を一切入れない赤子の言葉は神の言葉に違いない。そういう期待を持ってその命令を出しました。しかし、残念なことに、すべての赤ちゃんが15～16歳で白痴の状態で亡くなりました。しゃべることもできない、文字も理解しない、ただ生きている生物体として食べる、寝る、排泄することだけですべてが動物的に生きて亡くなりました。10年くらいしたら歩けます、外にも行けます。その外界の変化によって刺激を受けて、自己が存在するとすれば自我が形成されるはずなんです、全くありませんでした。

そして2つ目の話。これは1920年10月17日、インドのカルカッタ近くのみドナプールにて、シン

グ牧師により狼少女が救出されました。シング牧師が森に行った時に狼と少女に遭遇しました。5~6歳くらいの少女と1~2歳くらいの少女。狼から引き離してシング牧師夫婦が育て、教育をしました。1歳半のアマラという名前を付けた子は翌年亡くなっちゃいましたが、推定年齢5~6歳のカマラという子は9年間生きてたんですが、やはり15~16歳で亡くなりました。そして、その9年間、言葉も文字も一生懸命教育したんです。しかしカマラちゃんは狼の習性を残したまま言葉をしゃべることはできない、文字も理解できない、動物的な習性を残したまま亡くなりました。

この2つのストーリーから推察しますと、生まれた赤ちゃんには自己の存在はないということになります。しかし、生まれた後に、その自我が形成されるプロセスがあるようです。それもカマラちゃんのように5歳になってしまうと有効じゃなくなるみたいです。生まれてからある期間内にそのプロセスが無ければ自我の形成ができないようです。

生まれた赤子に自己（自我）の存在がないとすれば、一番大事なテーマ、いつ・どこで自己（自我）が形成されるかということが問題になります。哲学ではこのテーマを一切話題にしたことが無いんです。哲学ではデカルトの「我思う故に我あり」、要するに自己の意識があるところからスタートしているんです。でも生まれてからどうなの、というのは哲学の世界で掘り下げたことが無いんです。ですから今日の生まれた後にどうやって自己が形成されるか、というのは重要なテーマなんです。

ここに赤ちゃんの絵があります。赤ちゃんが生まれると名前をつけます。この子に「泰平」という名前を付けました。生まれたばかりの赤ちゃんは耳が聞こえないかもわからない、目が見えないかもわかりません。でも母親、父親、近所の方は赤ちゃんに向かって、「泰平、泰平」「泰平ちゃん」と名前を一日何十回・何百回・何千回と1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月、6ヶ月、8ヶ月呼び続けます。「泰平、泰平」というのは一定の音波振動数ですね。「泰平、泰平、泰平」という一定の音波振動数を呼び続けることによって、赤ちゃんの耳から皮膚からまたは骨からその音波振動数が伝わって、やがて赤ちゃんの脳のある部分に泰平自己という塊になってきます。これは見える話じゃありません、見えないけれどその泰平自己が出来上がります。そして10ヶ月、1年経過すると、「泰平」と呼びかけるとニコニコ喜んで呼ばれる方に歩いてきます。その時はもうすでに泰平自己が赤ちゃんの体の中で成立している時期です。

そしてその泰平自己はいろんな服を着ていきます。この服というのは、洋服のことではありません。タイトルのことです。一番最初に着る服は「男の子」というタイトルです。そして幼稚園生、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人になれば、「何々会社社員」、そして「何々会社課長」、「部長」「取締役」「社長」というふうにどんどんタイトルを付けていきます。そして結婚すれば「夫婦」、子どもができれば「父親」「母親」というタイトルがついてきます。そういったタイトルを「我己」といいます。英語で言うと自己の方が **The Self**、我己が **The Social Self**。この「自己」と「我己」、両方で「自我」といいます、**Ego** といいます。ですから、生きていくということは、自我形成をしていくという宿命にあるということです。ですから自我が悪いとかいいとかいうのではなく、自我を形成していくというのは全ての人にとって必然性があります。重要な事です。ただし、生まれてから10ヶ月の間、脳のスイッチが開かれているようです。この時に名前を呼ばないと自己の形成はできないようなのです。ですから、カマラちゃんの場合も5~6歳ですから、いくら呼び続けてもカマラ自己が形成できなかった。ここにいる若い皆さん方が結婚して子どもができた時、1年間何も話しかけないでください。それによって証明できるんです。でもこれはあまりに恐ろしい実験なので、とても勧めることはできません。おそらく、フリードリヒ2世がやったように白痴になる可能性が大きいです。しかし、ここまでの話で、一番大事なことは、言いたいことは何かというと、人體と自我とは別々であるということが言いたか

ったのです。皆さんは人體と自我とはイコール、一体であると考えられていますが、実は人體と自我は別々のものである。

もう一度冷静になってみますと、生まれてきたのは体です。体が生まれてきました。皆さんの誕生日は体の誕生日です。でも、今皆さんが自由に使っている自己（自我）、体の主権者、主体者が、実は何ヶ月もかかって外から名前を呼び続ける事によって、何ヶ月もかかって形成された自己（自我）なんです。ですから自己（自我）が生まれたわけでは無いんです。体が生まれてきた。自己（自我）は外から繰り返し繰り返し呼ばれることによって、自己が形成されタイトルを背負いながら自我形成をしていくという仕組みなんです。要するに体と自我とは違うという事。イコールだったら世の中は非常にシンプルなんです。皆さんがもし海外に行って、パスポートもない、身分証明書もない、事故にあって死んでしまうと皆さん方が誰かを特定するのはまず不可能です。皆さん方がコンピューターでインプットした歯形とか指紋とか眼底とか、ある時期にコンピューターにインプットしたものと比較して、多分この人に間違いないだろう、という事であって、全くそういう事をしていないと、誰だかわからない。要するに人體と自我とは別々のものであると言いたかったんです。

では、人體が成長する、体が成長するにはどうすればいいんでしょうか？（会場に質問「ご飯を食べる」）正解です。一人目で正解ができました。感性がすごくいい方だと思います。ご飯を食べて栄養素を取り入れて人體は成長します。でも、もうひとつ、自我のほうはどうすれば成長するのでしょうか。これが問題です。自我が成長するには言葉と文字と数と名の4つが不可欠です。

小さい子が自我形成をしていくことを想像してみてください。一番最初に覚えるのは言葉です。それから文字を覚えますね。それから算数を勉強して、あらゆるものの名称、名を覚えていきます。それによって自我形成していくというプロセスがあります。しかし、皆さんはもう大人ですが、皆さんにとっても言葉と文字と数と名は不可欠なんです。これは地球上の72億全ての方にとって不可欠なんです。例えば言葉と文字と数と名がこの世からすべてなくなったとします。コミュニケーションも出来ません。仕事も出来ません。契約書にサインもできません。結局そうなってくると、どうやって生きていけるかという動物的な感覚で食べ物を臭いでかぎ分け到達し、危険を察知して逃げる。動物の世界に行くことは可能です。正に動物の世界では言葉もいない、文字もいない、数もいない、名も必要ありません。唯一、ホモサピエンスだけが自我を形成するためにこの4つの栄養源が必要なんです。この4つの栄養源がなければ、あらゆる世の中の仕組みが成り立ちません。

言葉と文字と数と名は極めて重要なファクターです。そのうち名には、宇宙一切合切の萬名と先ほどのタイトル、我己名があります。その我己名が自我形成にとって重要です。仮に独身の男女がいたとして、友達関係としましょう。友達を認識して友達を演じています。この未婚の男女が結婚するとなると夫婦を認識します。夫婦を認識すると夫婦のしぼりがかかって夫婦を演じないわけにはいかなくなります。友達関係の時には、お互いに自由に遊んで、どこにいても一週間会わなくても全然問題が無い。メールを時々すれば友達関係が保たれる。でも、夫婦になって縛りがかかると、例えば男性が1ヶ月くらい外泊して居場所が分からないとなると大変なことになりますね。離婚騒動になる可能性もあります。夫婦になると夫婦を演じないわけにはいかないんです。それによって自我形成が大いに進むんです。皆さんは会社でタイトルをお持ちだと思います。係長とか課長とか部長とか、タイトルを持つことによって縛りがかかってそれを演じない訳にはいかないんです。一般社員より社長のタイトルの方が重いです。また、ここに国会議員の先生がいますが、一般の方より先生のタイトルはもっと重いです。目立っちゃうから町の中で色々な事ができない。縛りがかかって国会議員を演じないといけないんです。世界中の全ての方たちはこの名の仕組みの中にあります。今、世界で一番重いタイトルは

オバマ大統領と習近平国家主席でしょう。非常に重いものを背負っています。相当自我形成できているはずで、自我形成にとってその仕組みは不可欠なんです。

そして今、名宮、名化された現世、宇宙、国家、社会、民族、宗教、教育、学問など、一切の萬名、この名の世界であるという事なんです。現在はあらゆるものが名に変わっています。後から名について出てきますが、あらゆるものが名の世界にあるという事。名が無ければ宇宙もない、社会もない、あらゆるものが名によって構成されて、それを認識している現世、これが名の世界。名の世界には言葉も文字も数も名、その萬名も我已名も全てなの範疇にあるという事です。後ほどこれをもう少し詳しく紐解いていきます。

皆さんは大方日本人だと思います。他の国籍の方もいるかもわかりません。でも、日本人であるという認識を演じている世界について説明をします。1945年に第二次大戦が終わった時、中国の東北部のいわゆる満州。今でいう吉林省、黒竜江省、遼寧省、内モンゴルの一部に満州国が存在していました。13年4ヶ月くらいでなくなりました。満州国には5つの民族が生活して、大体4,000万~5,000万の人口がありました。その中で日本人が約80万人、そこで生活をしていました。ところが敗戦で何とか生きて日本に帰りたいが、生まれて1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月の赤子を抱えて混乱の中、生きて日本に帰ることは不可能と思われました。混乱の中、船に乗って帰れるかどうかもわからない、赤子のミルクもない、そういう中で多くの日本人は赤子を中国の夫婦に預けました。「何とかこの赤ちゃんの命を育ててください」と置いてきました。その赤子は、今年70歳になります。大多数の子供たちは、中国の言葉、中国の文字、中国の数、中国の名を取得して、中国人と認識して、中国人を演じて、中国人として何の問題もなく生活している人が大多数です。しかし、今から15年くらい前、中国の養父母があまりにも年を取ってきたので、残留孤児として日本の父親、母親探しが始まります。子どもに「実はお前の父親・母親は日本人であった」という話をした瞬間、その中国人を何十年もやってきた方が、突然日本人を認識して、日本人を演じないわけにはいかなくなります。そこで、なんとか日本に行って日本の親戚を探し当てたい。多くの方たちは、大変苦勞が多かったようです。

この事が何を意味するのか。全ての動物は子供を産んでDNAを継承する事が可能です。子どもを産むことよりは、子どもを育て、教育していく自我形成をさせていく時間と環境の方が、よほど重くて大きなことだと思います。そしてエネルギーが必要です。要するに子供を産む事よりも、どう育てるの、どう教育するの、という事の方が重要です。その事を考えると医学的には他の方の卵子や精子で子供を作ることが、倫理的にとか、本当の父親・母親はどうなるの、というテーマは小さいと思います。どういう風に育てるのかの方が重要です。でも法律的にはDNAの方が優先されます。時代は少しずつ、育ての親の権利が大きくなってくると思います。

2つ目の重要なことは、DNAの中には国籍・民族の情報はありません。世界中どの方たちのDNAを取っても、そこには国籍・民族の情報はありません。でも皆さん方は国籍を意識している。これはどういうことかと言いますと、この自我形成の過程、教育の過程で言葉と文字と数と名を取得しながら日本人を認識して演じている。中国人を認識して演じている世界であるということなのです。これはすごい重要なテーマなんです。未来において、大学生の若い方たちが、民族や国籍の認識が自我形成の中で出来上がって認識している、演じていくという理解が進んできた時に、おそらく、未来に民族と国籍の壁を卒業できる可能性があります。絶対的にそうだ、というところから、逆に民族と国籍はそうじゃないんだということ。将来、未来、国籍・民族の壁を卒業できる可能性があります。ただしここで卒業という言葉を使っている以上、この自己（自我）が、アイデンティティ、民族の意識を持つ、国籍の意識を持つというのも重要、不可欠なんです。これを十分経過しないと卒業できないんです。簡単に

壁を壊したり乗り越えたりすることは不可能です。ですから、民族、国籍を否定する話じゃありません。でもこの民族、国籍をどうやって認識しているかを考えた時に、教育の過程で認識しているという事。という事は未来に国籍・民族の壁を卒業できる可能性があるということ。ですから、現時点の世の中の人は染みついてしまっているから難しいですが、大学生、20歳くらいの人達の20年後、30年後、こういう話を重ねてしていく事によって変わる可能性がある。ホモサピエンス、ひとつの種なんです。民族が違っていても結婚すれば子供が作れるんです。ひとつの種なので元々助け合える。そういう事が教育の過程で認識が変わって来ればもっと平和になれると思います。そういう時が来なければいけないんだと思います。

今は壁の中で物事を考えている。そうだとすると他の国は信用できない、他の民族は信用できない、とすればこの国の中で全てを完結しないとイケない。歴史を振り返るとエネルギーが戦争に繋がってました。他の国が信用できないと、産地からそれをタンカーで運んで、日本で発電してエネルギーに変える。これは国防上、今はやむを得ないと思います。でも未来、この国、民族が卒業し、地球の72億が役割分担をしてお互いに助け合うという教育が行きわたった時にどうなるでしょうか。エネルギー、食糧は全部解決できます。例えば、ロシアの北方に油田もあればガス田もあります。その取れたところで多くの国が発電所を作る。モンゴルの地下にもシェールオイルが世界の100年分くらいある。石炭もあります。取れたところで巨大発電所を作る。その他、風力に適したところ、ダムに適したところ、あらゆる地域の得意なところに巨大な投資をして、世界送電線ネットワークを作る。今の技術ではロス率も極めて少なく、海底電線もできます。そうするとエネルギーコストは極端に下がります。エネルギーは十分に賄えます。ただしこれは未来の話です。今は壁の中で考えているのでできない相談です。切断されたら国がバンザイしてしまうような事はできない。だからこそ20年先30年先に世の中の仕組みを変えてもらいたい。お互いに信頼できる環境に変えてもらいたい。そうするとエネルギーも食料も解決できます。

例えばモンゴルには13年間で30回くらい行っています。今のエルベグドルジ大統領が民主党の党首になったり、選挙に落ちたり、日本に来たりした時に、一緒に食事をしたり色々な話をしました。モンゴルが一番東側、ノモンハン事件があったところは、ソビエト連邦傘下の時に広大な農業地区でコルホーズをやっていました。モンゴルは小麦、トウモロコシ、玉ねぎ、ジャガイモの輸出国でもあったんです。ところが、ソビエト連邦1991年の崩壊とともに若い人が全部都会に出てしまって、市場主義経済になった結果、モンゴルの食料は崩壊して輸入国になったんです。今、アジアの中で気になるのが北朝鮮です。北朝鮮の2,500万人の食料を未来に解決しなくちゃいけないかは南北の問題だけじゃなくてアジア全体の問題、世界全体の問題でもあります。そこでこの13年間、モンゴル政府にドルノト地域の100万ヘクタールをお借りできますか、そして、そこに日本、韓国、中国、ロシアがお互いに農業支援、資本と機械、ただし農業労働者は北朝鮮から連れて来る。北朝鮮の人で10万人規模で、農業製品、酪農製品、牧畜をして2,500万人の食料が全部解決できるんです。土地があるんです。カザフスタンにもモンゴル以上に広大な土地があります。まだ開発されていない場所がいっぱいあります。例えばコメ、日本には素晴らしいコメの技術がありますが、残念ながらTPPなどで世界に勝てる競争力は無いんです。日本のコメはその地域で消費する地産地消で里山は維持できます。ただし、もっと本格的な資本と技術を投入するのは、カンボジアとかベトナムとか二毛作、三毛作のところに技術と資本とすばらしい労働技術を投入する事でみんなが分かち合う。それぞれの地域にはそれぞれの特徴があります。それを未来、分かち合えるようになることになれば、おそらく今の争い元がほとんど解決できるようになります。

これの一番の問題は国、民族。国、民族が戦っている問題じゃないんです。日本と中国が戦っているわ

けじゃない。日本を背負っている方たち、中国を背負っている方たちが、その自己（自我）が戦っているんです。つまるところ、未来にこの3つの壁、自己（自我）がどうすれば卒業できるの、という話につきます。未来にここに行きつかなければ、非常に危険な第三次核戦争になる可能性は極めて大だと思います。今を作っているのは今の大人たちなので、大人たちが作った社会なのでどういふ変化が起こってもそれを甘受するしかありません。でも、未来に第三次核戦争が起こるようなものは残したくないですよ。できれば、未来には国、民族を超えてお互いに助け合える世の中が来てほしい。技術的なバックアップもある。でも問題はここだけなんです。自己（自我）をどう卒業できるか、という事なんです。皆さんは自己（自我）を卒業しなくても結構です。どうせ20年後にはほとんどいなくなりますので。問題は若い人なんです。この自己（自我）をどうすれば卒業できるかが最大の問題です。

先ほど言ったように4つ。自己（自我）とはなにか？人（人間）とはなにか？生命とはなにか？実能とはなにか？この4つを掘り下げる事によって世界中の問題の根本的な解決方法が見つかってきます。日本が国連で、原爆を減らしていこう、核弾頭を禁止にしたい、と言うと156か国が日本に賛成してくれるんですが、先ほど言った10か国の核保有国は全く賛成しません。それは、それぞれの国の利益のためにしないんですね。つまるところはそれぞれの自己（自我）のテーマになっちゃうわけです。ここまでの話では、自己（自我）がいつ成立するの、そして自己（自我）がどうやって形成されて成長するの、というのが分かった時に、国、民族のテーマもやがて卒業できる可能性があるということまでできました。

そして更に、人（人間）という2番目のテーマに入っていきます。ここに、「人（人間）とは何か」という5名の学者のセンテンスが出ています。例えば利根川 進先生は、『生命科学の究極の研究目的は、「人間とは何か」という疑問の解明だ』。山本 仏骨先生、『すべての宗教および学問は、人間とは何かを問い求めることにこそある。しかし、答えはまだ出ていない』。山本 信先生、『「人間とは何か」というのは、カントが哲学の全ての問いは最終的にはそこに帰着すると言った問いであるが・・・』。松井 孝典先生は『自然科学にしる社会科学にしる、哲学にしる文学にしる、その問うところは、つきつめていけば「人間とは何か」という永遠不変の命題である』。小林 秀雄先生、『「人間とは何か」についてははっきりした説明がいくつもあれば、ちっともはっきりしないことになる』。このセンテンスを見ていただいて、人間とは何かという問いは、自我とは何かというテーマよりも人類にとってもっと大きく重いテーマのように思います。そして、人間というタイトルがついた本は国会図書館にいくと1,000冊あります。1,000冊ありますが、どの本を読んでもこれが人間であると理解できる本は一冊もないんです。それぞれの著者の人間観はでてくるんですが、全部バラバラなんです。それほど、人（人間）というのは大きなテーマです。

人間という言葉、これは昭和の初めの辞書には世間、世の中、社会これを人間（じんかん）という呼び方をしていました。中国に行って人間という単語を使うと、世間、世の中、社会の事なので全く意味が違ってきます。日本と韓国は間違ってしまったんですね。昭和の初めの分厚い辞書には、誤ってしまった、と出ています。人間の注釈のところに、世間、世の中、社会とでていっているんですよ。誤ったまま今日まで来てしまったので、中国に行ってこれを使う時には注意してください。

先ほど言ったように、リンゴの表面に政治も経済もあらゆるテーマがありますと、それを掘り下げて、掘り下げていくと4つの命題にぶつかります。ひとつめが自己（自我）とはなにか？2つめが人（人間）とはなにか？です。これはあらゆる職業の方たちも、掘り下げていけば、広島原爆を何とか世界中の人に理解してもらって、核廃絶を訴えても、まずこのテーマ、自己（自我）とはなにか？人（人間）とはなにか？がわからずして、自我に訴えかけても中々難しいのが現状です。人とは何かというテーマ

に関してのヒントはあります。

人というフレーズは72億すべてを含めて人という単語が使えます。ですから、人という文字の頭に個人という言葉をつける個人という言い方は誤りなんです。小林秀雄さんはさすがに気が付いていました。人というのは72億すべてでこの文字が使えます。その反対語は自己です。72億分の1が自己です。ということは、今の世界は人の世の中ではなく、72億バラバラの自我の集合体。本当の意味での人の世の中という単語が使うには、例えば人體のように役割分担をして調和がとれている世界、それができて初めて人の世の中と呼ぶ事ができます。例えば、人體は60兆の細胞で出来ています。一つ一つの細胞には100%のDNA情報があるにもかかわらず、髪の毛は髪の毛だけ、爪は爪、皮膚は皮膚、その働きがあって後はそのすべての情報は眠っています。これは60兆の細胞が、それぞれに役割分担をしながら、きわめて調和がとれている世界。もし地球上の72億の方たちがお互いにそれぞれの役割を分担しながら調和がとれ、争いが無く、お互いに助け合う社会が来た時に、はじめて人の社会、世の中という単語が使えます。ですから今は自我の世の中である。ほとんどの方が、一つ一つの人體と、一つ一つの人體の主権者であるそれぞれの自己(自我)を指して、人という風に間違った解釈をしているんです。ですから、みんな人じゃないかという言い方をしているんですが、これはあえて言えば、人體の機能は世界中全部一緒ですが、その主人公たる自己(自我)はバラバラなんです。そのバラバラの自我、あるのは自我と体の自我體ですから、今の世の中は自我の世の中です。かといってそれを批判したり否定したりするつもりは毛頭ありません。それは進化の過程でどうしても通過しなければならない過渡期にあると思います。未来、自我を卒業する事が出来た時に、72億がお互いに役割分担をしながら、争いが無く、お互いが助け合える世の中が未来に来なければいけないと思います。また、その可能性が十分にあると思います。しかし、現在はまだまだ、その状況じゃなくて、壁の中でまだまだそれぞれの自己主張と企業の利益、団体の利益、国、民族の利益を主張し合っているという状況にあると思います。未来、卒業の 때가やがてくるストーリーがあると思います。

いま、そこまでの話を言葉で分かりやすく話していますが、文章にするときつくなります。タイトル「人(人間)でなく、生まれてもいなかった」

『生まれたのは、人體の赤児である。出生後、命名により、命(ナ)付けられ、名が肉声による一定波長の音波「呼稱音声」として赤児の脳の「命の座」にくりかえし送り込まれ、凝合一転化して、自己(自我)へと変貌する。この経過を経て、赤児として生まれた體は、何時しか「ナ(氏、名)・自己」のモノとなり、且つ體の誕生日も「ナ・自己」の誕生日へと摩り替えられる。さらに5~6才にして「人(人間)」なる名を受けとり「人(人間)」を演じる。しかし「人(人間)」ではなかった。「人(人間)」、その正態を暴いて診れば「人(人間)」とは似ても似つかぬ「ナ・名」にすぎない稱呼が転化し、人體の脳の中枢に主権者として納まり、「人(人間)」を演じていたのである。この世は、人(人間)の世界ではなく、「人(人間)」ナル名を受取り、演じているだけの自己(自我)主態の世界である。』

要するに體が生まれてきました。そして、その體に自己(自我)が外から呼び名によって宿り、そしてその體の主権者となります。そして、その體を主権者は好きなように使う事が出来ます。そして5~6歳になり、泰平ちゃんはや、人間だよ、というふうにタイトルとして刷り込まれて、人間なんだと認識して、人間を演じている世界があるという事なんです。この事は悪い事では無く、人類が素晴らしいステージに進化していく事を前提として、今の世界はこういう世界だという事。こういう話をすると多分3%くらいの方は気づくんですね。大多数の方は怪訝な顔になる。若い人はもう少しパーセントが多い。頭に柔軟性がありますので。今まで話したことを文書にするとこういう事なんです。突然説明もなくこの文章をみちゃうと「えー、なんだ」と感じちゃうと思いますが、前置きのストーリーを聞いた上でこの文章を見れば頷ける方もいるかと思えます。

さあ、人の次は生命とは何か、命について触れます。

『命と命の核（究極の實能）』

『宇宙森羅万象を包含する能（タイ・ハタキ）を「名」にすることはできない。だが敢えて「名」にすると「命」になる。生物の生きてゆく原動力。命を命たらしめたのは何者か？命以上の（ナ・名）が唯一名である。その名「X」こそが命の核だったのである。それらが「究極の實能（ジツタイ）」である。

全生物、三千万種中、唯一ホモサピエンスのみが命名ができる。人體のみに命の核が備わるからで、人體は「命の核體」といえるゆえんである。その人體に、命の一片としての「名」が稱呼され、その命の座のとなりに附着する名の転化者である自己もまた命と直結しているのです。

命とつながっていなくては、「コトバ」が使えない。そして「ナ・名」を命（ナ）づけることができない。

「ナ・名」を命（ナ）づける。－これは、萬生物中人體にのみ備えしめられた「秘能」である。

ありとあらゆるものに命名されている。これらの総べての「名、名稱」および「コトバ、文字、数、名」の命名、創出元が「命」なのである。すべての「名、名稱」および「コトバ、文字、数、名」は命の変化能であり、いわば命の一片である。』

命には2つがあります。生命と書くと「生」の方、見える方の命です。あらゆる地球上の生物は生物體と見る事ができます。「命」の方は目に見えないハタラキです。生物體を働かせる命のハタラキ、これが「命」の方です。そして、あらゆる見えないエネルギーによって、生物が動かされている。繋がってなくては存在できない。例えば、皆さん方は命とつながっている、命のエネルギーと繋がっているから皆さんの人體は体温がある。体温があるし、心臓が動いている。もし、外で交通事故にあつて、御臨終になってしまう。しかし、體の組成、鉄分とかカルシウムとか、全ての組成は今と御臨終と全く一緒です。組成の分量は一緒なんです。ですが、一方は体温があり動いている。一方は体温が無くなり、心臓が止まってしまう。今が命とつながっている。見えない命のハタラキと繋がってはじめて、命の動きがある。エネルギーがある。でも、無くなってしまった時には命の絆から離れていってしまう。という事なんです。見えない命のハタラキ、宇宙一切合切、この空中にも原子レベルで言えば酸素があれば炭酸ガスがあれば色々な元素レベルがうじゃうじゃある。でも見ることは出来ない。それぞれの元素レベルでの命のハタラキ、と繋がっていて見えています。原子核の中に陽子とか中性子とかあらゆる命のハタラキがあります。そのあらゆる命のハタラキを働かせている中心の存在、これが究極の實能となる命の核です。この命の核の断片、一片ずつが、唯一ホモサピエンス 72 億の人體の脳のあるところに一片ずつあるわけです。それがあつることによって人體が全てのものを名付ける事が出来る。

そして、言葉、文字、数、名。言葉という名、文字という名、数という名、名という名、これは全部名の範疇になります。この全ての名、これは命の変化体、命から発生しているんです。実は、言葉も文字も辞書があります。でもその発明者はどこにも出てきません。これは、ある意味では湧き出てきたと言ってもいいくらい。ただしそれは、その時々、編集する方とか多くの方が、それぞれの人體を通じて、それを言葉にしたり、文字にしたりしています。でも、その源は命のハタラキの中から出てきた言葉、文字、数が人體の自我を形成するためにどうしても必要な栄養源として、言葉、文字、数を駆使して自我形成をしているという仕組みにあります。という事は全てが、命のハタラキの手の内にあります。人體も元々精子と卵子が結びついて何百万倍も人體が成長していく、これも命のハタラキのひとつです。そして、その體が、言葉、文字、数、名という命の変化体を駆使しながら自我形成していく、見えない自我も全部、命の範疇にあります。それから、皆さんの主体、自我、例えば佐藤泰平という自己（自我）、これも一片の呼稱が繰り返し呼ばれることによって、やがてそれが呼稱名の転化者がそれぞれの主体者です。これも命のハタラキの範疇にある。全て一切合切、命の手の中にこの世の中が全部存在している。ですから、命の手の中に存在しているすべてのものを否定したり批判したりする対象ではないんです。必要だからあるんです。必要だからすべてが今現在存在しているんです。

今、地球上の 72 億の全ての方々の自己(自我)が責務。名宮なる現世において、すべては名の世界ですね。今の世界はある意味では名を取り合いながら自我形成している。あらゆる名を取り合う。大統領の名を取り合う。アメリカではヒラリーさんなど沢山いますよね。日本でも選挙のたびに落ちるか、入るか、名の取り合いをやるわけです。全ては名の仕組みの中にあります。企業同士も、世界ナンバーワンのアップルも座を取ろうと企業同士の戦いもあります。この全てが、名の世界の現世において、名が名を用いて問い求めている。要するに最初の名というのは佐藤洋治、呼称です。「洋治、洋治」というのがやがて自己になり、自我が形成された、元々は名です。その、それぞれの名が名を用いて、全て名を駆使しながら答えを求めて、名が無ければ問うことも出来ない、研究もできない、企業活動もできない。あらゆる名が名を用いて問求めるのであるから、結果、得られるものも名でしかない。当然です。それは、上辺での名でしかなく架空のもの、やはり仮である。本物ではない仮である現世は政治、経済、学問、宗教等々、すべてうまく収まるようには出来ていない。仮である現世が全てうまく収まってしまうと、今の状態のままで終わりを迎え、次に進めないからである。次のステップとは人の子が人になる成人成就の事である。自己は人體及び脳を育成し、最後に本精、人精とも融合をもって、人の完成に進むことが責務として課せられている。人體に収納し、人體を勝手に使用している各自己の名の転化者が命の一片でもあれば認識はしていなくても實能の代行者としての役割を持たされている。

少しこの文章は難しいんですが、要するにこの全て名の世界の中で、名の世界は本物の世界ではなく仮の世界ですよ、やがて人の子が人になる。やがて究極の實能、そのハタラキは本精、人精です。自我が大きく形成されてきます。見える世界じゃありませんが、形成されてくるとその隣接したところに本精、人精、もともと究極の實能に埋め込まれた、これも見えない世界で大きく育ってきます。だから裏と表のように臨界点まで育ってきます。そうすると、やがて最終的には個々の話じゃなくて地球上の 72 億全ての自我のエネルギーの話です。その自我がやがてその裏に潜む究極の實能の人精、本精との融合。やがて卵子と精子の融合の様にその時期が来るんでしょう。その時にはじめて、人の子が人になる。要するに今は、人の子という言葉の實能は自我體です。72 億バラバラの自我體が、やがて次のステージに、本当に人になる、要するに 72 億が全体としてハタラキ、役割分担をしながら一つの機能としてハタラキを持つことが出来る時がやがてくる。これが人の子が人になるという事なんです。要するに今、72 億の自己(自我)は大いに自我形成をしつつ、臨界点まで自我形成をして、やがて次のステージ、後ろの見えないハタラキ、本来の本精、人精との融合を以って、人の子が人になるステージが用意されているんだな、という話です。

そして、今ここで、少し名について。もう少し名を掘り下げないと、得られるものは名でしかない、上辺での名でしかなく、架空のもの、仮である。このフレーズをちょっと紐解かなきゃいけないので、名について皆さんと少し掘り下げていきます。これは大森荘蔵さんという日本の哲学者で「流れとよどみ」というエッセイ集の中にこんなフレーズがあります。『昔々、オックスフォード大学に一人の中国人留学生がやってきた。一人の教授が大学中を案内してやったが、それが終わって留学生の言うには、色々なカレッジや図書館や寮を見せていただいたが、オックスフォード大学は一体どこにあるんです。』

もう一つは、『自己、ナーガセーナと呼ばれているが、あるのはナーガセーナという名前だけであって、その名で呼ばれるべき自己の實能はない。それはミリンダ王が乗ってきた車と呼ばれるものの實能がないのと同じである。』名は明らかに實能そのものじゃないんです。名は實能を表現しようとして、できるだけ實能に近づこうとして付けられたものが名です。ですから名は仮のものであって本物じゃないんです。オックスフォード大学には実際にキャンパスもあれば生徒もいれば教授もいる。あらゆる設備があって動いていますよね。大学全体でおそらく数万人いる。どんどん変化している。途中で辞め

ていく人もあれば、教授も入れ代わり立ち代わり。これがオックスフォード大学というのは無いんですよ。オックスフォード大学という概念はあるんですが、これがオックスフォード大学というのは無いんですよ。それもおなじで、ナーガセーナという高名なお坊さん、あるのは名だけであって實能はない、と言っているんです。これが名の本質を現した大森莊蔵さんのエッセイの一部分なんです。

日本の古い辞書から引っ張り出してきた、名についての注釈。うわべ。形式、表面上の名目。

「名」は「實」の賓 (ヒ) 一賓とは主たるものに副 (リ) うもの。賓とは賓客というでしょう。賓自體ではなく「名」は主たるものに副うもの。「名」というのはあくまでも實能そのものではないんです。實能そのものではないんです。實能を現そうとしている、主たるものに副っている仮の状態が「名」なんです。宇宙森羅万象、一切が名によって構成されているこの世界は、實の世界というのは仮の世界。名の世界なんです。ですから名の世界はやがて實の世界、次のステージに行く可能性があるというのはこの名の世界の自我のエネルギーが究極のところに行った時に、やがてこの宇宙一切切の創り主のかけらが埋め込まれている、その本精、人精も自我の形成と共に裏で大きく形成されてきて、やがて、融合した時にはじめて人という名に値する状態になるというような事です。時間がある方は読んでいただければ、今の説明を文章にするとこういう事になるという事で、説明を聞かずに文章を読んでしまうとちんぷんかんぷんなんです、説明を聞いた方が読んでいただければ飲み込めると思います。

自己稱について、「人称代名詞 (一人称) として用いられている「私」「俺」「我」「吾」「僕」「自分」。これは人称代名詞、一人称として皆さん習ってきました。しかし、実は日本の古い字典、辞書にはこれは自己の稱 (自己代名詞) と記されてあります。要するに自己が主張する時の主語が人であるはずがないんです。人というのは 72 億で人でしょう。72 億分の 1 の自己が主張する時に使う主語、これが実は自己稱と辞書には載っているんですが、どこかで間違ってしまったんです。人称代名詞として間違っていて訳されてしまったんです。要するに「人」とは 72 億の総称なので、人称というのは 72 億の代名詞じゃなきゃいけないのに、72 億分の 1 の自己(自我)が主張する時に使うこの言葉、これが今日間違っていて理解されてしまったという事が、分からなくなってしまった一つの大きな原因です。

そしてこれは大漢和の中に出ている言葉の注釈です。【受講者に大漢和をお読みいただく】いね。わたくし。自分。自己。自分の事物。個人。公の對。かたおち。かたておち。不公平。偏頗。よこしま。邪曲。自分の欲望。我慾。獨りで居る事。かくしごと。秘密。わたくしする。自分のものにする。自分の利をはかる。かたよる。不公平をする。よこしまをする。ひそかに。ひとりで。心の中で。こっそり。かくれて。ゆばり。ゆばりする。小便。溺。姦通。男女のかくし所。この禾 (のぎへん) にム、これが自己代名詞の親玉みたいなこの言葉は、ここに出ているように本来の意味はきれいな言葉じゃないんです。この言葉を使うという事はお互いに小便をかけあって、肥やしをかけあって、自我形成をするのに役立つんです。

この言葉は、小さい子、3 歳、4 歳の子供は「みっちゃん、みっちゃん、太郎ちゃんと遊ぼうよ」とこの自己代名詞を中々使わないんです。ところが、5~6 歳になってこれを使うようになると、おしゃまになって一気に自我形成が進みます。ですから、ある意味ではこの言葉は自我形成が進む上では必要です。でも、自我形成が十分できた方々がこれをずっと使っているとどうなるか。この言葉の第一義は「いね」です。米を作る稲です。いねは田植えをして、真夏の間青々と茂って、光合成ででんぷん質を沢山蓄えます。そして、やがて秋にそのでんぷん質を稲穂の先のコメにエネルギーを変換していきます。ここが大事なところで、時としていねがいねのままで終わっちゃう。先のコメができない場合がある。ですから自我形成を進めるためのこの言葉を使いすぎて、永遠に使い続けるといねの

状態で終わってしまう。青々とした状態で終わってしまい、次のコメにエネルギーが移転しないという現象が起こる。ですから、あるところでこの言葉を使わないでいられる状況にどこかでなれるはずなんですが、惰性で使っているだけなので使わないで済みます。18年間、この言葉を使わずに、ビジネスも家庭も友達も今日も一切使わずにやってきてもなんら支障が無いんです。逆に聞きやすくなる。

この言葉を使わない事によって、それぞれの3つの壁から卒業に近づくことが可能です。50歳くらいの時、24歳からずっと仕事をやり続けて、いくらやっても仕事はいい時も悪い時もエンドレス。非常に精神的によくない状態の中で、どうすればもっと安らげるのか、という時期がありました。そしてある時、50歳を過ぎて少しゆとりが出来て哲学者とか色々な方と会って、議論をして今日の答えに近づきました。自己稱を使わない事を18年やってみると、2~3年すると、いくらやってもむなしいな、という感情と寂しいな、という感情と、不安だな、という感情がなくなります。この自己稱、さっき言ったように自己稱はいくつかありますよね。自己が主張する時に使う言葉、これを使わないだけでご利益があります。そして、英語でも実は、人称代名詞を使いすぎる人を、自己中心的に過ぎる人、エゴのかたまりだと言っているんですね。そして英語では大文字のI(たてぼう)は自己代名詞なんです。ですが、日本語では人称代名詞にしちゃったんです。人じゃない、自己なんです。どこかで間違ってしまったんですね。でもこれは、間違いを正す事だけで、3つの壁からの卒業に近づけるんだらうなという気がします。これは強制では無くて遊びながらチャレンジしたらいいと思います。

最後に皆さんに説明をしておかなければならないことがあります。今日皆さんにお伝えしたことは、約50年前の1957年から1969年にかけて日本でその答が出されておりました。その方は2010年6月、96才でなくなりました。その方は多くの方々との出会いにより、今日のこの答を出す役割を担うことになりました。その方は名前がありません。この答を名を持って伝えることはできないとして、個としての一切の自己中心性を断ち切り、約半世紀間この答を伝えてきました。名が無いから飛行機に乗ることも出来ません。働くこともできない、という状況の中で5年前に亡くなりました。その方が亡くなる前、約13年間、その方との交流を重ねてきました。亡くなった年、2010年6月に亡くなってから、財団の仕事を9月からスタートするわけですが、天のハタラキというか天命というか、答えを今、時代が必要としているとして、今日皆様にお伝えしましたが、世界中の大学の若い人にも伝えながら、次、本当の意味でも人の世の中になってほしいという期待をもって伝えていきます。その方が、答えを出すことになった経緯、いきさつなどを手作りで2部冊に製本されたものがあります。その方の傍にいた方が製本したものです。日本の古い漢字が多用されており、難解なものです。しかし日本語に精通し、興味がある方、欲しいという方にはその2部冊を進呈します。ですから事務局に送り先を言ってください。その2部冊を無料で進呈させていただきます。

賢明な皆様にとっては、何故に今日の話をしたのかはお分かりの事だと思います。今日の講演のタイトルのように「やがて世界は1つになる」ためには何が必要でしょうか？自己(自我)の卒業が必要であり、その時がどのように訪れるのか？そして「人」となる時が未来にくるという希望をもって今を生きることにつなげようということです。そして今日話したことは、100%正確で間違いのないというものではありません。何故ならこの名の世界において、名が名を用いて話しているからです。但し名の世界の主権者を演じている各自我は、實能の能(イタキ)である本精(人精)と表裏一能(タリ)にあります。従って今日の話は、やがて来るであろう「人の完成」に繋がるものとして、希望を持ち続けるに十分であると受け止めています。

今日、短い時間で哲学的な難題について掘り下げて、皆さんと約2時間、時間を共有しました。しかし、現状が自我の世界である、そして未来にはやがて卒業する時が来るという夢と希望を持てるとい

う話なんです。ですから、今現在の世の中が自我の世の中であり、その自我がどのように生まれてから出来上がるのか、という仕組みをまず気付く事。気付くことがまず最初です。気付いた後、その自我は意味があるんですね、存在している意味があるんだよね。どういう責務があるんだろうか、これに気付くこと。おそらく気付く人が年々増えています。特に若い人には増えています。気付いてから次、未来、できれば世界が信頼できる、お互いに助け合える、そういった、本当の人の社会になることを期待してこの財団の活動を続けているという事であります。

<質疑応答>

佐藤：どんな内容でも遠慮せずに質問をしてください。

質問：フジサンケイビジネスアイの濱口と申します。西洋哲学の世界では心身二元論というのが、心と体の二元論の中で、心というのは魂という切り口だったんですが、今日伺ってびっくりしたのは自我という切り口から心身二元論というものが説明されたことです。そこに至るまでの発想、どう至られたのかをお伺いしたい。

佐藤：一番最初のスタートは高校生の頃。要するに何で生まれてきたんだろうか、生きる事は何だろうか、と要するに佐藤洋治の自己が中心で掘り下げていきました。ビジネスをやっている中でも、常に何のために仕事をやっているんだろうか、何のためのビジネスなんだろうか、目標は本当はどこにあるんだろうか、その答えを求めながら多くの人との出会いの中で、やがて今日のような答えに近づいていった。そしてこの答えを 20 年近く掘り下げて行って、これは人類の壮大なストーリーして受け入れられる、これ以外の答えは無いな、という状況にあった。これは次のステージに夢を持てるんですね。ですから先ほど絵に描いたように、学問も永遠に続ける、学びという事を永遠に続けるのではばかみたいですね。最終的にどこを目指していくの、というところで、普遍的、根本的なテーマ、全ての哲学も学問も宗教もこの答えに近づいていく、そしてそこに 72 億の壮大なストーリーがこの中に絡み合っている、という風に理解していく事がすごく夢が持てるし、現状の全てを否定しないで済むんですね。その他にある政治の世界も、アメリカと中国との関係も、全部否定しないで済むんですね。しかし未来はもっと良くなってほしいという。人との出会いの中で、一番最初は自己中心のものの考え方、自己がどうして存在するのか、何か特別な意味があるんじゃないかというところでスタートしたんですが、掘り下げてみたら個の自己の話じゃなくなっちゃったんです。72 億の自己の話に繋がった。そこが自己の責務だったんですね。興味のある方は事務局に聞いていただければ毎月日本でこういった講演がどこかで行われています。明後日は名古屋で行われます。日本の大学でやる場合も事務局に問い合わせれば、その教室に入っていく事も可能です。何回か聞いてみてください。1 回でこれだけ難しい話を飲み込むのはまず不可能です。何回か聞いていると少しずつ、少しずつ入ってくるという事です。

他に何かありますか？無いようでしたら、今中国で一番多く大学まわりをしているので、中国で毎年 1 回コンベンションとあって、日本とか仁川とかバンドンとか上海とか、都市を変えて大きなコンベンションを開いています。参加大学が 200 を超えて、参加するプロフェッサーが 600 名というくらい。今年 8 月 1 日に中国の上海で行いました。それで今日のような話の短縮版をプロフェッサーの前でさせていただいて、ディナーの時に「中国共産党の上海の公安の者です」と二人が来たんですよ。その二人が言うには「理事長の話が今日よく聞いていました。中国共産党の最終目標と理事長の目標は同じです」と言うんです。びっくりしました。8 月 1 日以降も中国の他の大学とも話をする機会がいっぱいあって、中国共産党の事、共産主義の事を大学の先生方と話をしていたら分かったこと。「共産主義の究極の目標というのは人の開放ですと。制約が無く、本当に自由にお互いを助け合いながら、管理する政府も無くなるのが最終の目標です。しかし今はその途中で、どちらかというと社会主義に近い、計画経済、国が全てコントロールします。そういう状況に

あるんですが、最終目標はそうなんです、と。過去、何度か実験しましたがみんな失敗しました。失敗の最大の理由は自我を卒業できないことにあります。」そういう話があがってきました。

5年間、中国で100回くらい講演をしてきましたが、一度も共産党からクレームが来なかったのはそういう事かなと。レッテルを張らないで、色々な方と主義主張は違っても、宗教は違ってもことん話し合ってみるという事が大事かなと思います。だから若い人には海外に行って、多くの方達とコミュニケーションを取って、友達同士になれるよと、そういうところを未来に作っていかなくちゃいけない。片方の道は核弾頭による戦争の道、その可能性もあります。ISの状況を見てもISはやがてバチカンを誘導ミサイル、またイスラエルへの攻撃もありうると思います。そうすると極地核戦争、ヨーロッパが戦火になる可能性は十分にあると思います。しかし、未来に、どうしても若い人達には夢と希望を持って、民族国籍を超えて、お互いに仲良く暮らすという世の中、本当の自我の社会から人の社会になってほしいという想いで、今は天命みたいな形で、70歳になっちゃいましたが、飛行機で動き回っています。やっていることが楽しい。学生と会う事も楽しいし、たまの休みのゴルフも楽しい。楽しみが2つですね。そんなことでちょうど時間になりました。皆さんの直接の役には立たないと思うんですが、よく聞いていただきましてありがとうございました。

以上

一般社団法人パチンコ・チェーンストア協会

〒104-0061 東京都中央区銀座1丁目14番4号プレリー銀座ビル5階
TEL 03-3538-0673 FAX 03-3538-0674
URL <http://www.pcsa.jp/> e-mail info@pcsa.jp